

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

一夫多妻でも多夫多妻でも一夫一妻でも、メスは子育てをする。しかし、オスが子育てをするかどうかは、場合による。つまり、一夫一妻的な社会が成立したときに、その役割が大きく変わるのは、メスではなくてオスである。①カノウセイが高い。そのため、ここではオスに注目してみよう。

四足歩行をしている類人猿るいじんえんの集団を考える。その集団の中のあるオスに突然②ヘンイが起きて、直立二足歩行をするようになった。

直立二足歩行をするオスは、両手を使って、子どもに食物を運ぶことができる。すると、その子どもは、食物を運んできてもらえない子どもよりも生き残る確率が高くなる。

ここまでは、多夫多妻でも一夫多妻でも一夫一妻でも、話は同じである。しかし、この先が違ってくる。まず、一夫多妻の場合は、オスが③セツキヨク的に子育てに参加することは考えにくい。④そこで、一夫多妻は⑤ジョガイして、多夫多妻と一夫一妻を比較ひかくしてみよう。

多夫多妻的な社会の場合、どの子が自分の子なのかわからない。したがって、直立二足歩行によって食物を運んで生存率を高めた子どもが、自分の子どもの場合もあるし、他人の子どもの場合もある。つまり直立二足歩行をする場合もあるし、しない場合もある。そのため、直立二足歩行は増えていかない。

しかも、親のレベルで考えると、直立二足歩行をしない方が得だ。食物を子どもに運ぶために、余分に採し回るのは危険である。肉食獣にくじしよくしゅうに食べられる確率だつて高くなる。それなら直立二足歩行なんかしない方がよい。食物を子どもに運ばないオスの方が生存率が高くなるからだ。したがって、⑥多夫多妻的な社会では、直立二足歩行は進化しん化しないはずである。

では一夫一妻的な社会の場合は、どうだろうか。この場合は、ペアになったメスが産んだ子は、ほぼ自分の子と考えてよい。したがって、直立二足歩行によって食物を運んで生存率を高くしてあげた子は、たいいてい自分の子だ。自分の子には直立二足歩行が

遺伝する。だから、直立二足歩行をする個体数は⑦。

どうやら、一夫一妻的な社会が成立すれば、直立二足歩行が進化しそうである。でも、最後に一つ、忘れてはいけないことがある。直立二足歩行には移動速度がおそいという欠点がある。利点があっても、その欠点を上回らなくては、利点は進化しない。果たして、そんなに利点は大きいのだろうか。

自然選択説によれば、有利な特徴を持った個体は増えていく、つまり有利な特徴は進化すると考えられる。

⑧、サバンナにすむチーターは、走るのが速い方が有利だろう。だから、走るのが速いという特徴が進化したのだろう。でもそれは、走るのが速いことが直接進化に結びついたわけではない。⑨ 走るのが速いために、残せる子どもの数が増えたので、その結果、走るのが速いという特徴が進化したのである。⑩、子どもの数を増やす特徴だけが、自然選択で進化するのである。

どんなに素晴らしい特徴でも、子どもの数を増やさない特徴は、自然選択で進化しない。たとえば、⑪ムズカしい計算ができるという特徴が、進化するかどうかは微妙である。ムズカしい計算ができるのはよいことのような気がする。でも、それって⑫と関係があるだろうか。もし無ければ、自然選択では進化しないのだ。

そう考えると、「両手が空くので食料が運べる」という特徴は、かなり進化しやすい特徴であることがわかる。なぜなら、子どもの数に直結するからだ。子どもの数を直接的に増やす特徴には、自然選択が強力に作用する。つまり、一夫一妻的な社会では、直立二足歩行に自然選択が強力に作用する。その結果、⑬直立二足歩行の欠点を利点が上回り、地球の歴史上初めて、直立二足歩行をする生物が進化したのだろう。

注 犬歯が小さくなった理由として「約七百万年前に人類は一夫一妻的な社会を作った」という仮説が立てられた。この仮説を検証するため、これが直立二足歩行の進化も説明できるかどうかを検討された。その結果、この仮説によって、直立二足歩行の進化も説明できることがわかった。したがって、この仮説は少し良い仮説になった。

正直に言って、それほど強い仮説ではない。しかし、現時点では、これが最良の仮説と考えられる。約七百万年前に人類は一夫一妻的な社会を作りつつ、直立二足歩行と小さな犬歯を進化させたのだろう。⑭人類は平和な生物なのだ。

(『若い読者に贈る美しい生物学講義』更科功)

注 犬歯・・前歯と奥歯おくばの間にある、鋭すどろくどがった歯。肉食動物で特に発達し、牙きばと呼ばれる。

問一 — 部①・②・③・⑤・⑪のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 部④に当てはまる一文として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子どもが少ないので、オスは自分のことだけを考えていればいいからだ。

イ 子どもがたくさんいるので、子育てはメスに任せることになるからだ。

ウ 子どもがたくさんいるので、多くの食物を運ぶ必要があるからだ。

エ 子どもが少ないので、オスが子育てに参加する必要がないからだ。

オ 子どもがたくさんいるので、どの子が自分の子かわからないからだ。

問三 — 部⑥「多夫多妻的な社会では、直立二足歩行は進化しないはずである」とありますが、なぜそのように言えるのですか。

文中の言葉を使って、理由を二つ書きなさい。

問四 — 部⑦に当てはまる最も適当な語を次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 増えていく イ 減っていく ウ 変わらない エ どう変化するかわからない

問五 — 部⑧・⑩に当てはまる言葉を次のア～カのうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ ちなみに ウ 要するに エ また オ たとえば カ でも

問六 — 部⑨「走るのが速いために、残せる子どもの数が増えた」とありますが、なぜ「走るのが速い」と、「残せる子どもの

数が増える」のですか。考えられる理由を、十五字以上二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問七 — 部⑫に当てはまる言葉を、文中から五字でぬき出しなさい。

問八 ——部⑬ 「直立二足歩行の欠点を利点が上回り、地球の歴史上初めて、直立二足歩行をする生物が進化したのだらう」とありますが、「直立二足歩行の欠点」と「利点」とは何ですか。文中の言葉を使って「欠点」は十五字以内、「利点」は三十五字以内でそれぞれ書きなさい。（句読点は字数に入れません。）

問九 ——部⑭ 「人類は平和な生物なのだ」とありますが、筆者は、人類のどのような面をとらえて「人類は平和な生物だ」と考えているのですか。百字以内で書きなさい。（句読点は字数に入れません。）

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〈急死した父の四十九日の法事に、本来の形式ばった集まりをさげ、「私」(由里)と母で過ごす〉

いくらつまみを回しても、カセットコンロに火がつかなかった。どうやら、ガスがなくなっていたらしい。

「うわあ、①こんな時に最悪だね。私、スープまで行つて買ってくるよ」

駅前のスーパーに急いで行けば、まだ間に合う。お財布を取り出そうとバッグの持ち手に触れた時、

「大丈夫」

母がしっかりとした②「タイド」で言った。

「だって……」

せつかくのきりたんぼなのだ。父の四十九日に食べる、特別なきりたんぼなのだ。

「ここで食べればいいじゃない」

母は、台所のコンロの前を指差した。

「でも、こんな所で食事したら、お父さんに叱られちゃう。お行儀が悪いって」

私はすっかり子どもに戻ったような気持ちになった。父は、言葉遣いや礼儀作法に関しては、人一倍口うるさかった。

「化けて出てくるなら、出てこいっていうの。いいわよ、二人で、ざまあみろ、って言ってやりましょう。こんなに素敵な奥さん

とかわいい娘を置いて早死にしちゃったんだから」

母は、すでにどこかでこっそりアルコールでも口に含んだのだろうか。けれど、母の③「シユチヨウ」は揺るがない。

コンロを挟むような形で、椅子を二つ置き、器と箸とお猪口を並べる。父が栓を開けてそのままになっていた純米酒を、それぞ

れのお猪口に少しずつ注いだ。

「天国のお父さんに」

(中略)

まずは、スープを一口。けれど、あれ？ 気のせいかと思つて、もう一口。すかさず、母が私の顔をのぞき込む。

「どうして？」

④ 思わず、目を宙に泳がせてしまった。

「おいしくない？」

不安そうな少女の瞳で、母が私の顔を見つめている。どう答えたら母を傷つけないで済むか、必死に考えたものの、うまい言葉は見つからなかった。母はすぐに、自分の器に口をつけた。

「ああ、ダメだ。すっかり味がわからなくなっちゃった」

母は、哀しそうに目を伏せた。こんな表現しかできない自分が情けないけれど、それは、ぞうきんを絞ったような味だった。強烈な味はしないけれど、舌を通過した数秒後、苦いような臭いような心底嫌な味がじわじわと顔全体に広がってくる。

⑤ おしようにゆがあんまり効いていないみたい」

なんとかその場を取りつくるおうと、とっさに適当なことを口走った。

「そうよね、おしようにゆ、入れ忘れたのかも。今、入れるから器に入っている分も、お鍋の中に戻してくれる？」

母は立ち上がって、冷蔵庫の扉を開けた。それから、鍋全体にしょうゆを回しかけた。菜箸でひと混ぜし、もう一度煮えばなを器によそう。ふうふうと息を吹きつけて冷ましてから、おそるおそるスープを含んだ。けれど、ぞうきんの味はますます強烈になつていった。

「お母さん、きつと私達、二人とも⑥ ミカクがおかしくなったのかも。だって、きりたんぼがこんな味するって、今まで一度もなかったし、おかしいじゃない。お父さんがいなくなったショックが、そういうところに出てるんじゃないかな。いいから、気にしないで食べようよ」

母があまりにもしょげているので、可哀想かわいそうになった。本当に、私達の舌がどうかしてしまったのだ。それ以外に、原因は考えられない。

「そうね、お父さんが好きだったきりたんぼだもん。おいしいよ、おいしい」

母は無理にそう言っ、器の中に入っていたものを次々と口の中に押し込お込んだ。私も、肉や野菜を無理やり口に詰め込み咀嚼そしゃくする。

「おいしいね」

言っではみるものの、二人とも明らかに箸を動かす手がだんだんゆっくりになっていく。

「由里ちゃん、もう無理して食べなくていい。おなか壊こわすといけないから」

母の表情をまつすぐに見ることができなかつた。もうその声色こゝろだけで、がつくりとうなだれていることが伝わってくる。

「今まですつとお父さんのために料理作っ生きてきたから、もう作れなくなつちやつたんだね」

そう言う母は、今にもオサナゴのように泣きだしそうだった。

その時、あつ、と母が小さく叫さけんだ。何事かと様子をうかがっていると、母はおもむろに立ち上がり、再び冷蔵庫の扉を開ける。

また、さつきと同じしようにゆの入った瓶びんを取り出した。そして無表情でキャップを持ち上げると、そのまま瓶に口をつけて飲み始めた。

「お母さん、やめてー！」

戦争の時、しょうゆを飲んで徴兵ちやうへいを逃れたという人の話を思い出した。⑧すると今度は、母がゲラゲラ笑い始めたのだ。

「ねえ、お母さん、どうしたの？ ねえ」

正直、母の気がおかしくなつてしまつたかと思つた。けれど母はひとしきり笑つたあと、

「由里ちゃんもこれ、ちよつと飲んでごらんよ」

そう言っ、しょうゆの入つた瓶を手渡す。

「うわあ、何これ？」

しょうゆの味と香りとはほど遠い、ぞうきん絞り汁を濃縮させた、まさにまずきの原液だった。瓶を両手に握りしめたまま、母はしんみりとした表情を浮かべ、ゆつくりと椅子に座る。何かを思い出したらしい。

「これさ、お父さんが入院したっていうんで、会社の部下だった方が、お見舞いに持ってきてくれた薬草茶なの。免疫力が上がるすごいお茶だって言われて、家で煎じてお父さんに持って行つたのよ。でもお父さんったら、一口飲むなり、こんなまずい物口に入れられるかー、って不機嫌になつて。だけど貴重なお茶だし、まだ残っていた分は、この瓶に入れておいたのね。でもすっかりそのこと忘れてて。しょうゆと間違えて、使っちゃった。これじゃ、おいしくなるわけないわよね」

「そうだったんだ」

言つたそばから、^⑨笑いと切なさが半々ずつ、じわりじわりと胸の奥から沸き上がった。

「こんなまずいの、誰だつて無理だよ」

「そうね、お父さん、俺の気持ちをわかれつて、それで天国から遠隔^⑩ソウサして仕掛けたのかな」

「それもあるし、もしかしたらお母さんのこと笑わせたくて、悪戯したのかも」

母も、私と同じように泣きながら笑っている。

（「季節はずれのきりたんぽ」小川糸）

問一 —— 部①「こんな時に最悪だね」とありますが、「こんな時」とはどのような時ですか。二十五字以内で書きなさい。

（句読点は字数に入れません。）

問二 —— 部②・③・⑥・⑦・⑩のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 — 部④「思わず、目を宙に泳がせてしまった」とありますが、このときの「私」の気持ちを説明したものととして最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア スープの味がおいしいと母にうそをつかなければならず、いらだっている。

イ スープの味が予想と違ったことを母に伝えるのは、絶対に嫌だと思っている。

ウ スープの味の感想を母にどう伝えたらいいかわからず、とまどっている。

エ スープの味がまずいことを思いがけず母に知られ、申し訳なく思っている。

オ スープの味がおいしいと母にどう言ったら伝わるのか、思い悩んでいる。

問四 — 部⑤「おしよゆうがあんまり効いていないみたい」とありますが、

(1) 本当はどんな味がしたのですか。十二字でぬき出しなさい。

(2) なぜ「私」は本当のことを言わなかったのですか。三十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問五 本文を通して、母はどのような人物として描かれていますか。母の人物像を説明した文として最も適当なものを次のア～

オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 娘が気づかかって出した提案をなかなか受け入れられず、結局自分のやりたいようにふるまってしまう自由気ままな人物。

イ 夫を亡くした悲しみをのりこえようと無理に明るくふるまっているが、その悲しみをかくしきれていないすなおな人物。

ウ 娘とやりとりをするときは明るい、亡くなった夫の思い出話になると悲しさのあまり取り乱してしまう感情的な人物。

エ 自分が思ったようにうまく物事が進まなくても、あきらめずに何度挑戦しようかと前向きに考えることができる人物。

オ 娘のことを何よりも大事に思っており、娘が失敗したことでも自分のせいにして傷つけないようにする愛情深い人物。

問六 — 部⑧「すると今度は、母がゲラゲラ笑い始めたのだ」とありますが、母が「ゲラゲラ笑い始めた」のはどのようなことに気づいたからですか。文中の言葉を使って書きなさい。

問七 — 部⑨ 「笑いと切なさが半々ずつ、じわりじわりと胸の奥から沸き上がった」とありますが、「笑いと切なさが半々ず

つ」とはどういうことですか。七十字以内でわかりやすく説明しなさい。(句読点は字数に入れます。)

問八 本文の内容に合うものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 母の言動は予想がつかないものが多く、そんな突拍子とつひようしもない言動に振り回され、娘は常にとまどっている。
- イ 母は娘を必要以上に気づかっっており、娘もそれに応えようとするので、悲しみをのりこえようとしている。
- ウ 母の言葉すべてが本心から出たものであり、その言葉に娘は勇気づけられ、母娘の絆きずながより深まっている。
- エ 生前の父は気むずかしい一面があつたが、好きな菓草茶を母娘に飲ませようとするはずら好きな性格でもあつた。
- オ 母娘はきりたんぼを通して父のことを思い、あらためて亡くなった父の大きな存在を心に感じている。